
幼稚園百三十年記念企画
アーカイブズ『幼児の教育』(8)

今回のアーカイブズは、昭和七（一九三二）年の『幼児の教育』第三十二卷第六号に掲載された、当時の東京女子高等師範学校附属幼稚園の六クラス（五歳児、四歳児クラス各三クラス）の担任全員による、五月二十三日（月）～二十八日（土）一週間の保育日誌、「五月の一週間」からの抜粋である。（編集部）

五月の一週間

—東京女子高等市範学校附属幼稚園に於ける保育の貫際—

は し が き

倉 橋 惣 三

幼稚園は生きてゐる。その生きてゐるところを、ありのまゝに、なまなましく記しとめたのが、之等の日記である。保母諸君は皆、お恥しいことと言つてゐる。人に示さうとする標本でもなく、保育の型でもないのである。いは勿論である。しかし、その中に、私達が平生話しあつてゐる考へ

方や、心もちが、全局的に、又部分的に、おのづから實現せられてゐるものに相違ない。私としては、それが今更にうれしい。また、そこを汲み取つて下さる方があつたら、手をさし伸べて握手したいやうの氣がする。と同時に、批判と異議とも、先づ私にぶつつけて頂かなければならない。

各組は、同じことをしてはゐない。しかし、離れてもゐない。一つの幼稚園の組々として、統制のある獨自を持してゐる。保育は一定の原理に基礎づけられてゐるが、その實際は、どこまでも、保姆その人の創造によるものだといふのが、私達の信念である。

保育は、幼兒を保姆の計畫の中へ押し込めて來ることではない。幼兒達の生活へ保姆の方から赴き往くものである。しかし、それと少しも矛盾しない意味で、保姆の計畫と、工夫と、考案と、準備とによつて、幼兒達の生活を一層生かしてゆくのが保育である。私達が、無計畫保育をしてゐるやうに見える人もあるかも知

れないが、とんでもないことだ。我園の保姆諸君は、幼兒を頭から虜にしやうとするやうな鬼でもないが、計畫と準備をなしに其日々々がやつてのけられるやうな、神通力の所有者でも大膽者でもない。

保育の計畫は、ただ考への上の立案だけではない。況んや、紙の上に書いた保育項目の次第書だけではない。幼兒達の生活が、そこから誘ひ出され、そこへ納まつてゆく、具象の實體で準備せられる。頭で計畫し、物で準備し、保育項目を放射させ、聚約させ、幼兒の生活を、生活としての自由と必然とに生かしてゆくのが計畫である。個と群とを對象にして。

それにしても、生きた保育をするために、自分も刻々に生き、且、たえず創造してゆかなければならぬ心勞と身勞とは容易のことではない。しかし、さういふ保姆諸君こそ、刻々に保育の實際の味を味ひ樂しむことが出来る幸福な人であらう。

海 の 組

(満五歳より満六歳、男児十八人、女児十人)

菊池 フジノ

(菊池原注…) この組では、昨年春から、お人形のお家を中心としていろいろの仕事を進めてまゐりました。三月の學年末までにお人形のお家がまあ完成したと申しませうか、この四月からは、そのお人形のお家の外庭の方の仕事にかゝつて居ります。外庭の方は、先づ垣根を拵へ、犬と犬小屋、それから馬や牛や豚を拵へる豫定です。そしてお馬には馬小舎を、豚と牛には柵をめぐらさうと思つてゐます。それから大きな庭樹を二三本立て、その葉や花をみんな拵へるつもりです。尚ほ之につづいてゐる計畫は沢山ございますが、長くなりますから、こゝには申上げません。で、四月から只今までに垣根が出来ました。そして之にバラを這はせてゐます。このバラがまだ位出来ただけです。それから、お馬も出来上りました。馬小舎は出

来たばかりで、その中を塗るつもりです。それから豚は二つ出来た所、犬小屋も出来、犬は顔だけ出来、胴は今から作る所です。形が出来ると子供等は、塗り度いとせがみますのを、塗料の關係で今まで待たせてあつたので、今度塗る豫定に入れました。毎日午後にはこのお家の仕事を致しますが、都合によつて出来ない事もございます。之だけを申上げて、この週の日誌の不明を御諒解願ひ度いと存じます。

五月二十五日(水)

風強く落ちつかぬ日。

實習科生が拵へて置いたのであらう。衝立にかけてあつた五六組のやじろうべいを、朝、お室へは入るなりすかさじ發見して大悦び。おつむでも立てられる

と、誰かが自慢すると、いや、指先でも、爪先でも、お鼻の上でも出来るかと自慢の仕返し。朝のしばらくは、これに打興じる。私は昨日用意して置いた、緑の模造紙の二枚貼り合せたのを出して、椿の葉を切り始めた。やじろうべいに見惚れてゐた五六人は、「何するの?」とよつて来た。

「あの太い木(お人形のお家の庭木)の葉にするの、手傳つて頂戴、椿の葉よ」と云へばみんなが喜んで鋏を出しに行く。

「かういふ形?」「これでい、?」と口々に聞くので、お庭へ行つて椿の小枝を取つて来て、机の上に置いた。みんなはそれを見て切り、おまけに、葉の真中から縦に二つに折つた。葉脈の所で折目のついた様になつてゐるのを表はしたのであらう。それから女の子は、バラの葉も拵えると云つて、(お人形のお家に垣根を拵へ、それに花をつけたバラを這はせた、今漸く $\frac{1}{2}$ ばかり出来たところ)作り始めた。(針金四寸程の長さに緑の紙を巻いておく。子供等は之につける葉を

切り、之を二枚糊で合せながら針金に左右につける)

七八人の男女の子供達はこちらにはお構ひなしに、お人形のお家の、お馬や豚や垣根を、好きな所に並べ代へて、自分等が乗つたりお人形をのせたり、お家へはいつたり出たりして遊んでゐる。やじろうべいの一團も流石にあきたのか、それを机の上に置いて、椿切りにやつて来た。しばらく切りつづける。やがて、もうおしまひ、と云つてみんなは去つた。次いで私はお人形のお家の人達を誘つた。「嫌!」とにべなく断られた。「あらメリーさんはね、よくこのお家に手傳つて下さる方だけがお遊びにいらして下さい、と云つてましたよ」と云ふと、仕方がないと云つた表情で鋏を出して来た。そしてほんのお義理に、三四枚の葉を切つてはまた、元の遊びに歸つて行つた。お仕事の跡を片付け、今朝用意した、けしの花の花瓶を子供等の机の上に置いて、私も子供等の後を追ふて外の空気を吸ひに出た。見ると、元氣な一團は、龍太郎さんのリダーの下にかけっこ最中。他の五六人は茂さん指揮で

賣店から小學校の校舎にかけてかくれんぼ、女の子の四五人は例によつて石けり、ずうつと幼稚園のお庭を一周りしてまた私はお室へ歸つて來た。時に十時十分過ぎ。ちよんどこ、へ、○○さんが例によつて「みんな僕を入れてくれない」と訴へて來た。この人は、豪傑組からは除外されるし、と云つておとなしいグループへも入れず毎日ベソをかいては不平をかこつてある。或る日のこと、七八人がお砂場に大きなトンネルを作り上げて、今から積木の汽車を通さんと意氣込ん

でる時、突然そのトンネルを崩して「止ーした 今度はお團子作りをしよう」と叫んで、そばの茂さんから「○○ちゃん嫌だなあー！ 君、そんな事するからみんなから憎まれて馬鹿にされるんだよ」とたしなめられてゐたと云ふ。又或る子は「○○ちゃんは生意氣だから嫌ひさ」と云ふ。嫌ふ子供等にも理窟があるから思はれる様になつた。で、この頃はこんな言動を見る折々に宏ちゃんをたしなめ、同時にこのグループ外の他の人達と遊ばせる様努めてゐる。(後略)

森 の 組

(満四歳より満五歳、男兒十五人、女兒十五人)

新 庄 よ し こ

(新庄原注：) 森の組は去る四月八日入園したる年少組、はじめて保育を受けしより約四十日あまりを経たる幼児の一組。約半数の幼児は當初より附添と離れ、その後日を追ひて附添へるもの少なくなり、今は朝別

る、時に泣く子一人、それも二三分もたてば泣き止み得。されど他の泣くを見ては、或は何かの拍子に、とかくシクシクと泣きたくなるものは未だ二三人はあるといふ状態なり。

五月二十五日（水）

うす曇りの、しかも風の荒き日なれば大方室にあり。二人ばかり便所のたききに電車の繪を描いて居りしかば室のボードに伴ひ來て各色の白墨を興ふ。一人が一間ほどの艦とたこといかをかきたれば二人は潛航艇を二隻。一方のボードは赤、黄、緑等の線にて亂塗のさまなり、されどこれを見てみると、こゝは停車場、こゝはトンネル、お山などと云ひながら描いてゐるので自分が電車になつて、レールを走つてゐるところ、線は走つてゐるしと見えたり。それが二人で走るのでかくはめちやめちやに見ゆれどやがてこの一線が美事なる繪となるべきはじめと思はれたり。男の子にとりて線路はかなり魅惑のあるもの、哲彦が大きな紙に線路と、走つてゐる電車の繪を描きたるがあり、この繪の前に立ちては人さし指にてレールを撫でたる子四五人を見かけたり。心の中にては走りたるなるべし。

女兒九人、相連りて小學校女學校本校等歩き樹木を調べに行く、知つて居りしもの、

木 桐、松、つじ、あぢさゐ、いてふ、びわ、笹。
草花 すみれ、けし、しらん、金魚草、石竹、はら、スキートピー、菊。

野菜 さやえんどう、パセリ、そら豆。

さきのボードの繪に引きつづきめいめい帳面に自由畫を始む。入園當初より非常に大きな繪を描くもの四五人ありて、いつも一枚に描きつくせず、二枚つづきにするので、この為にとて立ちて大きな繪を描き得る書架を求めて興ふ。思ふ存分描くようなり、これ今は一箇なれば、兩面即ち二人づつはこれにて描く。體格検査の時休みたるもの四人、今日は揃ひたれば休養室に連れゆき身重、體重、胸圍をはかりおく。午後積木室より積木を森の組の室に一人づつ運ぶ。軍艦を作らんとてなり。されど大積木は池の組にて使い居り、どうしても借されないと幼兒に斷られしかば仕方なく、つかひ残りのみ今日は運び置く。大方よこれ

居りし故一同にて雑巾がけす。

二十六日（木）

（翌日は海軍記念日 編集部註）

軍艦。積木にて。

昨日より室に用意してありし積木に大きな箱積木を加へて艦の土臺（二間位の大きさ）出来かかり居り（実習生作る）早朝より來たる子等は手傳ふ。土臺の完成、欄干大砲等出來上る、次々に手傳多くなり煙

林の組

（満四歳より満五歳、男兒十五人、女兒十五人）

及川ふみ

五月二十四日（火）

*晴れ（倉橋記）

（略）粘土の板を洗つたり、きりがみの後始末をしてさき以外に出た人達を氣にして窓から見ると少し形勢不穩のため床をはく事を河合さんに願つて外へ出かけ

突はかようになどといふ。その他種々の注文によりなるべく是に添ふようにすれども、折角の申出が危険にて出來ぬこともありし。

是れ年長組ならば全然幼兒の發案製作に任せてすべきなれど年少組なれば保姆が主になりてす。

僕は車掌になつて乗りたいなと茂いふ、水兵さんでせうと云へばげげんなる顔。今のところ海陸共に車掌の權限と思ひ居るらし。（後略）

る。通りすがりに山の組の大きな自動車にのりたいたいゆので四人をのせて庭に出る。雨あがりの心地よいお天氣。砂場に一かたまり。ぶらんこに一かたまり。枠のぼりにも一かたまり。となつて遊んでゐる。今一緒に連れて出た腰巾着の三人とぶらぶらしてゐる人た

ちを集めて山の木の下に莫塵を四枚しいておままごとをはじめた。「及川先生はお母様よ」と云はれるままにすわると丁度よい場所へ陣どつた。どこで遊んで居る人も皆見えてよい。豪傑のKさんもGさんもすべり臺の下の砂場で盛に砂を掘つてゐる。

おとうさんは何雄さんよ。と誰かがいふ。外の人達も次々とお姉様やお兄様になる。それぞれに何かしてゐる。すべての点に大人ばいT子さんは「あらおかし

*

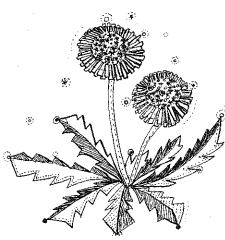
*

*

なことお母さんが及川先生でおとう様はまだ幼稚園の生徒さん、おほほ」と笑ふ。誰も氣にとめない。かたばみの實をとつてきてきうりだと出すと皆よろこんでさがしに出かける。煉瓦塀のそばに澤山ある。そのうちに月子さんがとうもろこしとうもろこしともつてくる。大ばこのつぼみで可愛らしいとうもろこしである。(後略)

(原文は一部修正 編集部)

東京女子高等師範学校附属幼稚園は、本邦初の官立幼稚園として一八七六年に創設されたが、明治期の思物中心の形式主義的傾向の強かつた保育を脱して、子ども中心主義的な保育を追求していた。本号で林健造先生が紹介されている菊池ふじの先生による「人形のお家」の実践も垣間みるこ



とができる。いわゆる誘導保育の一コマであるが、担任によつてそれぞれ特性のある指導性(倉橋は「統制のある独自」という)が発揮されていることが窺われ、興味深い。同幼稚園の建物は一九二三年の関東大震災で焼失した後、数年間の仮園舎の時代があつたが、この日誌の実践はその時代のものである(この翌年に、園は現在の大塚に移転した)。(編集部)

☆このシリーズは今回で終わります。